
SHADOW from FINAL FANTASY 6

黒鬼風斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H A D O W f r o m F I N A L F A N T A S Y 6

【Nコード】

N 7 4 7 2 M

【作者名】

・黒鬼風斗

【あらすじ】

漆黒のマスクで顔を隠し、金のために人知れず殺戮を繰り返すシヤドウ。彼は久しぶりに夢を見る。そう、まだ自分が本当の名前を名乗っていた時の、あの夢だ。偶然出会ったマツシュ達と行動をとるにする彼だったが、辿り着いた森の奥で見たものは、夢で見たばかりの「あの列車」だった。

（前書き）

コレを書いたのは2005年になります。久しぶりに読み返してみるとまだまだだなあと実感します。

ファイナルファンタジー6より、暗い過去を持つシャドウをピックアップして書いてみました。

…当時、ストーリーが王道過ぎるという感想を頂きましたw
短編読みきりですので、お気軽にお読み下さい。

今日も酒は不味い。

アルコールの強い酒を飲んで見ても、血の様に紅いワインを飲んで見ても、かつて“奴”と飲み交わした酒を飲んで見ても、やはり同じ味しかない。己の心が病んでいる証拠だと言うが、それでも飲まずにはいられない。いつしか俺の身体は酒を求めるようになってしまった。やめようにもやめられない、俺にとっては一種の麻薬のようなものだ。

周りを見てみる。真昼間だというのに、酒場の客は多い。五月蠅い程の音量で音楽がかかっているのだが、その音楽よりも大きな声で騒いでいる男達がいる。…男達に囲まれているのは若い、半裸の女。泣きながら何やら喚いていた。これから何をされるのか俺

いや、その酒場にいた全員がそれを悟っていたが、誰も助けようとしなかった。俺もその一人だ。

簡単な理由だ。男達は皆、帝国兵だからだ。

帝国兵に逆らえば何をされるか誰もが知っている。この街のように帝国に制圧された街の人間なら尚更だ。自分が可愛いから、他人のために危ない橋を渡るような事はしない。だから暴力や横暴を見ても見てみぬフリをする。それが人間の性だ。たまに自らを犠牲にしてまで他人を助けようとする奴がいるが、俺には理解出来ない。弱肉強食のこの世に、理性や正義感、勇気など何の意味も持たないはずだ。

…不意に、泣き叫ぶ女と目が合ってしまった。必死に助けを求めるその目を見ても、今の俺は何の情も湧かない。

厄介事に巻き込まれるのは御免だ。例えばここで帝国兵を蹴散らしても利点などない。

俺は音も無く席を立つと、相棒のインターセプターが付いて来ているのを確認し、そのまま酒場を出た。

酒場を出たすぐ後、女の一際大きい悲鳴が聞こえたが、『助けに戻る』などという愚かな選択肢は持ち合わせていなかった。

S H A D O W
 \ W i t h a f r i e n d , W i t h t h e c r i m
e \

その日、俺は夢を見ていた。
幾度となく見た事のある夢だ。いや、悪夢と呼ぶ方が正しいのかもしれない。

忘れようにも忘れられないモノ。忘れてはならないモノ。
始まりはいつもここからだ。

二人の男が、汽笛を上げる列車から大きな袋を抱えて飛び降りる。

「よつとー!」

音も無く着地すると同時に、列車が急停車する甲高い音が夜の闇に響き渡る。

「走れ!」

一人の男 ビリーが走り出す。もう一人の男 “俺”は

すぐに奴の後を追って行く。停車した列車からは大勢の人間が、“俺”達を捕まえるため、ライフルを持って駆けて来ていた。威嚇のためか、“俺”達の姿は闇に隠れているのにも関わらず、銃声が何発か聞こえてきた。

見晴らしの良い草原なら簡単に追いつかれ、捕まっていただろうが、夜の森では“俺”達の方が有利だ。逃亡のためにここいらの森の地形は全て頭の中に入れている。目を瞑っていたとしても、木に衝突したり転倒したりする事はまずない。

“俺”達は全力で森の中を走っていた。追手の気配がなくなっても、まだ走り続けていた。

やがて疲労のためか、ビリーが立ち止まる。“俺”も奴に併せて立ち止まる。

「はあ、はあ……。あー。走った走った」

「何だ、もうバテたのか？」

「馬鹿言え、もういいだろうと思ってな」

「確かに、もう追っては来ないだろうな」

耳を澄ましても、人の声も足音も聞こえない。聞こえるのはただ、風に揺れる草花の音と近くにある川のせせらぎだけだ。運が良いのか、魔物も近くにはいないようだ。いたところで、切り刻むだけだ。

“俺”は地面に腰を降ろすと、担いでいた荷物をビリーの前に置いた。そして、笑う。

「……しかし、楽勝だったな」

「はあ？お前がもつと計画通りに動いてりやもつと」

「どちらにせよ、成功には違いない」

「ま、いいけどよ」

俺は、こんな風に笑えたんだな。笑う“俺”を見て、ふと思う。この頃が一番楽しかったのかもしれない。二人で悪事を働き、奪った金で美味しい酒を飲み交わす、これを繰り返す毎日が。もう二度と戻らない、毎日が。

「さて、名前を付けないとな」

「名前？」

ビリーの言葉に、“俺”が問い返す。奴は何やら嬉しそうな顔をしていた。

「そう、俺達“列車強盗団”の名前！実はさ、もう考えてあるんだ」

その活き活きとした奴の両の目は、まるで純粹に夢を語る子供のようだった。もう子供ではなく、それも悪事を働いているのにも関わらず。

「“シャドウ”だ。いい名前だろう？」

そう、“シャドウ”。その名を、今の俺は借りている。“クライド”という名を捨てた時、この名しか思い付かなかった。“列車強盗団”として汚れた名しか、俺は背負う事が出来なかった。理由の幾分かには、奴と過ごした日々を忘れないためというのも含まれているのかもしれない。

夢は一旦ここで途切れる。この後、アジトに帰って盗んで来た金で騒いだ記憶がある。美味しい物を食って、美味しい酒を飲んで、ビリーは両腕に美人を抱えて、いつしか眠りに落ちた。…確かその美人

に、盗んだ金を全部持つて行かれた気がする。奴は「また盗めばいい」と笑っていた。

夢の続きもまた、いつものところから始まる。

列車強盗にしくじり、何も盗めずに尻尾を巻いて逃げ出し、そして。

「悪い、もう駄目みたいだ…」

地面にうつ伏せになり、銃で撃ち抜かれた腹部の穴を押さえようとせず、ビリーは力なく笑う。列車から飛び降りる際にライフルで撃たれた。地面に転げ落ちたため、銃創よりも顔や腕の擦傷の方が目立つ。“俺”はビリーの腕に肩を回して歩かせていたが、奴はもう限界を感じたのだろう。足元から、ビリーは地面に崩れ落ちた。“俺”はただ、ビリーを見ている。治療薬も持っていない上、追手が近付いて来ていた。奴の怪我のため、振りきる事も、遠くへ逃げる事も出来なかった。

「へへ…このまま二人で捕まるなんて、それ以上ダセエ事ねえよな」
「ビリー…」

「何て顔してやがる…。ほら、さっさと行けよ…」

ビリーの腹部から流れ落ちる血が、地面を紅く染めていく。見たところ銃弾は急所を外している。数時間放置されない限り、死に至る事はないだろうが、数分後には追手に捕まり、そして死なない程度に治療するはずだ。治療したその後は…。

これ以上もたましていたら追手に捕まってしまふ。“俺”は意を決して、ビリーに背を向けた。

走り出そうとした、その時だった。

「その前に、お前のそのナイフで、俺を殺して行け…」
「…っ!？」

奴の言葉に、“俺”は身を硬直させる。

「知ってるだろ？捕まったら最後、何をされるか…」

拷問。死んで楽になる事を許されず、延々と暴行をされる。拳句の果てに指を一本ずつ切断され、やがて四肢も切断される、と聞く。楽になれるのは首を切断される最後の瞬間。それまで、何年掛かるだろうか。少なくとも、一年は玩具にされる。

罪人に慈悲など与えられない。与えられるのはただ、最低限の食事のみ。

“俺”の手がナイフを強く握り締める。そして、ゆっくりと振り返った。

「せめて、お前の手で楽にしてくれ。頼む…」

ナイフを振り上げる。その時は気付かなかったが、その得物を振り上げる腕が僅かに震えていた。

…躊躇した。

人を殺す事に躊躇した事のない“俺”が、相棒であり、友であるビリーを殺す事を躊躇したのだ。

そうだ、この時ビリーをこの手で殺してやるべきだった。そうすれば、今のような悪夢に魘される事もなかったはずだ。何度も何度も、まるで己の罪を示すかのように、この場面を繰り返し見る事もなかったはずだ。殺してやるべきだった。殺して…。

“俺”の手からナイフが滑り落ちた。否、己の意思で落としたのだ。

その音にビリーが顔を上げ、“俺”の顔を見る。表情が変化していくのがよく分かった。

「お前…まさか…」

「すまない。俺には…お前を殺す事なんて出来ない…」

絶望した表情から、徐々に怒りに満ちた表情へ変わっていくその様は、その時まで見た事もなかった。殺意さえ感じられるその表情に、“俺”は目を背ける事しか出来なかった。

「俺に生き地獄を味わえと言うのか、クライド…っ!!」

「すまない」

追手の足音が聞こえてきたのと同時に、“俺”は踵を返し走り出した。

「クライド!!よくも !!!」

その叫びは今も尚、心の奥底で幾度となく繰り返す。憎悪に満ちたその声に、俺はビリーが俺を殺しに地獄からやって来るのではないかとさえ感じた。俺を殺しても晴れる事のないその怨み。霊となって再び俺の前に現れないかと期待している自分がいる。そうすればまた奴に会える。詫びる事が出来る。そのまま地獄へ連れ行かれてもまた構わないと思っていた。

そう、霊でも幻でも、また会う事が出来れば、もしかしたら…。

俺の中で、何かが変わるかもしれない。

いつものように、その夢が終わると同時に目が覚めた。

ベッドから上半身を起こし、窓の外を見る。外はまだほの暗く、そして何より静かだった。こういう状況では、何処かで休む事無く働いている時計の針の音も、自分の心の臓が脈打つ音でさえも耳を澄ませば聞こえてくる。

宿の部屋の見慣れない景色を何となく見渡している時、不意に気付いた。

マスクが濡れていた。指先で触れてみるとはつきりと分かる。

俺は…泣いていたらしい。幾度となく見たあの夢を見て、ビリーを殺してやれなかった夢を見て。

疑問が浮かぶ。

何故、今になって初めて泣いたのか。

…いや、そもそも何故泣いたのか。

自分自身の不甲斐無さからか、それともビリーの…。

何にせよ、俺にもまだ流せる涙があるのか。もう随分昔に感情を全て捨てていたはずだが、さすがに寝ている時は感情を制御する事は不可能らしい。まあ、どうでもいい。

「インターセプター、起きているか？」

俺の声にすぐ反応して、一声鳴いた。どうやら俺よりも早く目を覚ましていたようだ。マスクの濡れはインターセプターが俺を起こそうとして舐めた痕ではないかと少し思ったが、それにしても濡れている箇所があまりにも狭すぎる。やはり、俺の涙で間違いないら

しい。

軋むベッドを降りて、装備を確認する。短刀、金、手裏剣……。例え眠りに落ちていても誰かが近付けばその気配で目が覚める。だから盗まれるなどという心配は皆無なのだが、それでも念のために確認する。

「……残りはあまりない、か」

残金を確認しながら、そろそろ暗殺やボディガードといった仕事の依頼を受けなければならぬと思うが、今日はあんな夢を見たためかどうにもその気になれない。人を殺した時、ビリーの顔が浮かんで来て憂鬱な気分になりそうだからだ。

なら、今日はどうするか、考えてみる。

したい事もしなければならぬ事も特にはない。俺は少しの間、立ったまま目を閉じていた。

いつもなら酒場で酒を飲む。……不味い酒を。だが残金が少ないならば、無駄遣いは極力避けるのが賢明だ。

……気晴らし、という訳ではないが、少し旅人の真似事をする。草原や森を歩くだけで気が落ち着くだろうし、腕を落とさないためにも魔物とも戦っておかなければならない。ついでに途中で、殺意を持った人間に出会えるかもしれない。

「何処に行きたい場所はあるか？」

とインターセプターに聞いてみるも、俺は犬の言葉を理解出来る訳ではない。何処ぞの誰かが『想いが通じれば言葉も通じる』と言っていたが、そんな事あるはずがない。

インターセプターが鳴く。だがやはり、理解出来るはずがない。

「……適当に、歩くか」

俺は外に出るため、音も無く一步を踏み出した。

道なき道を歩き続けると、やがて広い草原に出た。周りは主に山と海、そして川。南の方には帝国の物らしき陣地。更に南には城が見える。その城には見覚えがあった。確かドマ城。…という事は、近くには街はない、

北西に見える一軒家。あそこには一人の男が住んでいたはずだ。…少々気違いの、な。

とりあえず水一杯でも頂きに行くか。帝国の連中が分けてくれるとは思わないしな。

…多少なり予測はしていたが、その男と俺の会話が噛み合う事はなかった。「外にある井戸を借りたい」と言うと、「井戸など壊れていない。壊れているのはベッドだ」と返って来る。因みにそのベッドを調べて見たが、別に壊れている箇所は見当たらなかった。

時間の無駄だと悟った俺は、「水を頂く」とだけ告げると、早々とその男の前から姿を消し、今に至る。俺は井戸に凭れ掛かり、インターセプターに水を与えていた。

不意に足音がした。近くで草花を踏み、こちらへ歩み寄る音。音を立てないようにはしていないところから敵の類ではないと思った。敵だとしても、そんな輩が俺に敵うはずもない。

「仲間と逸れてしまった。ナルシェへ行きたいんだが、ここからど

う行けばいい？」

現れたのは、見た事がある顔の男だった。いや、正確に言えば見た事のある男に似た顔立ちの男だ。以前酒場で見た事のある男は、気品に満ち、何処ぞの貴族を思わせる風格の持ち主だったが、この男からそんな風格は微塵も感じられない。動きやすいラフな格好で、服のしたからは鍛え上げられた筋肉が見える。

「…教えてやらん事もないが、情報料が要るぞ」
「げ、金取んのかよ。今は持ち合わせがないんだけど　　そうだ、俺の兄貴はある国の国王をしてる。協力してくれたら褒美がたんまりと貰えるはずだぜ」

男の言葉に、酒場で会った男の顔が浮かぶ。成程、双子という訳か。

「一国の王…通りで」

「何か言ったか？」

「いや。ナルシェへ行きたいんだったな。それならここから南の帝国軍陣地を抜け、そして森を抜けるしか方法はないだろうな」

「帝国…！？奴ら、こんなところにまで　　」

「恐らくドマ城を降ろすつもりだろう。ご苦労な事だ」

「…ついでに陣地もぶっ潰して行くか。すまない、ありがとう」

男はそのまま立ち去ろうと俺に背を向けた。俺に適当な事を言っておいて、結局情報料を渡さないつもりか。いくらあの男が律儀だとしても、名前も知らず、何処にいるかも分からない俺を探してまで金を渡そうとはしないだろう。最も、兄の方なら俺の名前くらい知っているだろうが。

しつこいようだが、残金は少ない。と言っても、数ヶ月程度なら

持つが…。

「少し待て」

「何だよ？」

男は振り返り、俺を見た。面倒臭いと言いたそうな面だ。

「お前について行く。倒した魔物や帝国兵から奪う金品をよこせ。それが情報料だ」

「ありがたいな、実は一人で帝国兵を皆ぶっ飛ばせるか不安だったんだ。アンタ強そうだし、頼りになりそうだ」

「フン。ただし、俺の気が変わるまでだぞ。もしかしたら陣地に着く前にお別れかもな」

「そうならない事を願う。アンタ、名前は？」

“クライド”という名前を捨てた当初、この質問にはたまに昔の名を言い掛けてしまう事があった、だが今はそんな事はない。その名は完全に捨て去った。今その名を知っている人間はほんの僅か、一人、二人程だろう。

不意にその心当たりのある顔が脳裏を過ぎった。白髪の老人と、若い女。“クライド”と俺の名を呼ぶ幻聴まで聞こえてきた。…その名は、捨てたのだ。忘れろと言っただろう。頭を揺さぶり、幻影を無理矢理に掻き消す。

そう、今の俺の名は。

「…シャドウだ。そう呼んでくれ」

マツシュと名乗ったその男の出身はフィガロだと言う。となると、あの男はフィガロ国の王か。色々な噂は耳にした事がある。若きその王は、女を見る度に口説きに掛かる、機械を弄ったりするのが趣味、帝国とは同盟を結んでいるが、裏では反帝国組織“リターナー”と手を結ぼうとしている、その他。

あの若さで一國を治めるとは、優秀な人間なのだろう。そうでなければ、とつくに王の座から引き摺り下ろされているはずだ。

「…さて、着いたぞ」

その一帯だけ砂漠と化している大地に、帝国軍陣地があつた。建物の壁らしき物が至る場所に見えるところから、この場所は元々廃墟だったという事が分かる。その壁越しに、陣地の中の様子を見る多くの帝国兵が件を片手に巡回し、中には魔導アーマーと呼ばれる機械に乗っている兵もいた。魔導アーマーを相手にするには二人では少々厳しいかもしれない。…ここは見付からない様に進むのが最良の選択のようだ。

「…どうする？俺はともかく、お前は見付からずに進むのは厳しそうだな」

その図体では何かと目立つ。嘲笑するように、俺はマツシュに言った。

「見付かった時は強行突破しかないだろ。何なら、突端から強行突破でも構わないぜ」

「お前の力量次第だな」

「俺様の力をナメてもらっちゃあ困るな」

ここまで来る途中何度か魔物と戦ったが、まだマツシユの力は見
ていない。と言うのも、相手の魔物の手応えがなさ過ぎて、俺も奴
も本気を出すまでもなかった。一刀両断、一撃必殺。ここに
いる帝国兵もその程度なら楽勝だろうが、その程度の力しか持つて
いないようなら苦勞はしない。力を備えているからこそ、街は徐々
に占拠されていく。

…何にせよ、生身の帝国兵相手に、俺は負けはしない。

「行くぞ。とりあえずは、見付からない様に、だ」
「おう」

レオ將軍にケフカと言ったか。その名前、この先、決して忘れは
しないだろう。

前者は帝国の人間でありながら、常に一人一人の兵の命を考え、
敵兵の命の事までも考えている。何故こんな人間が帝国に属するの
か、不思議に思う程だ。帝国も奴のような人間が多ければ、これ以
上戦火が広がる事もなかっただろう。尊敬に値する人間と言っても
いい。

後者はいわば前者と正反対の人間だ。人間の命など虫ケラのように
にしか考えていない。傲慢で、横柄で、横暴な奴は。
敵対する国、ドマ城に毒を盛った。同胞の捕虜が城内にいるのに
も関わらず、だ。

結果、ドマ城にいた人間の殆どが死に絶えた。運良く生き残った
屈強な剣士、カイエンは主を、妻と子供をその毒で失ったと言った。
奴から発せられる帝国への憤怒と殺意を、近くに感じるだけで感じら
れた。

俺は人間の死など、もう何も感じない。いや、感じないようにしていた。だが、しかし。

帝国に対する殺意が、心の奥底で小さく芽生えたのを、俺は感じていた。

「リターナー、でござるか」

「そう。俺はリターナーに属し、帝国と戦う気だ。もう奴らは中立の国でさえも容赦はしない。同盟を結んでいたフィガロでさえも襲撃されたんだからな」

戦うだと？

リターナーがどれ程の力を持っているかは知らないが、無駄な事だ。蟻が象に挑む事と同じような事だ。寄せ集めの集団で、力も数もある帝国に敵うはずがない。それに奴らは魔導の力を復活させていると聞く。それが本当の話ならば、尚更だ。

俺ならば、内側から帝国を潰す。暗殺は俺の得意分野だからな。

まあ、今のところそんな気はない。帝国も俺にとっては金蔓のような存在だ。暗殺の依頼の殆どが帝国兵からのモノだからだ。滅ぼすのは、その甘い蜜を吸い尽くしてからでいい。

「しかし…拙者達は何処へ向かっているでござるか？この森を抜けてもバレンの滝があるだけで…」

「さあ…。なあシャドウ、どうするんだ？」

マッシュが俺の顔を覗き込みながら言う。そろそろ察しが付いているかと思っていたのだが、どうやらこの男、おつむはイマイチら

しい。

「ナルシエに行きたいのなら、ここしか道はない。いや…他に無い事もないが、お前達では無理な道だ」

「そんなのやってみなければ分からないだろ？」

「では、戻るか？…遠いぞ。それに、こちらの道に行く方が早い」

「でも、滝からどうやって　まさか」

「　そう、滝から飛び降りる。漂着する先は獣ヶ原。そこから

“蛇の道”を通って…」

「“蛇の道”？」

「海の潮の流れ…。それに流されればいい」

「うへえ、流されてばっかかよ」

「文句を言つな。何日も掛かる道に行くよりはマシだろう」

「運が悪ければ死ぬでござるな…」

「…お前達は丈夫そうだから大丈夫だろう」

くだらない言葉のやりとりをしながら、森を歩き続ける。“迷いの森”の名の通り、似たような道ばかりで、何も考えずに歩いていれば何処から来たのか、そして何処へ行けばいいのか分からなくなるだろう。似たような道と言っても、木々の形状、コケの量、臭い等はそれぞれ違っていた。その違いを、俺を憶えながら先頭を歩く…後ろの二人は何も考えずに、周りの観察もせずに歩いているのだろうか。マツシユならばこういう森は直感で動きそうだが、カイエンはなかなか知的にも見える。奴も筋肉馬鹿と同等の知能しか持っていないようなら、俺が付いて来て正解だったかもしれない。もう十分に情報料と案内料は頂いたが、ここで別れて二人を飢死させるのは少々気が引ける。

「アフターサービス、だな」

「何？」

小さく呟いたつもりが、マツシュには聞こえてしまったようだ。相手にするのも面倒なので、無視して歩き続ける。自分の問いに答えてくれず、ふて腐れた奴の声が聞こえたが、それも聞こえないフリをした。

やがて、地面が土から人工的に作られたモノに変わった。景色も一変し、そして広い場所に出る。

そこには、存在するはずのない物があつた。幻かと強く瞬きをしてみるも、それは消える事はなかった。瞬間、あの出来事が脳裏を過ぎった。

「も…森の中にホーム！？しかも、列車まで…」
「き、奇妙でござるな。こんな所にこんな物があるなんて、聞いた事ないでござる」

まるで昔の夢を見ているような気分だった。列車の色、形状も全て同じだった。そう、“シャドウ”が列車強盗に最初で最後の失敗をした、あの列車と。

そんなはずはない。あの列車が脱線して炎上、爆発するのを俺はこの目で見ていた。人が焼け死んでいく様も見ていた。俺がレールに細工をしたのが直接の原因で、あの忌まわしき思い出のある列車は壊れたはずだった。

何故それがここにあるのか。

仮説としては『全く同じ列車を造った』が第一に挙げられるが、その可能性は低い。何故なら当時ですらその列車は古い型で、新しい型の列車に取り替えようと言われていた。そして取り替えられたその列車は鉄の塊に分解される予定だったからだ。そんな物をわざわざ造り直す必要はない。同じ理由で、『壊れた列車を修理した』という仮説も否定出来る。

情報が少ない分、憶測で生まれる仮説は数知れない。可能性が0

となるモノが殆どないためだ。

…考えても答えは出ない。思考を止めようとした、その時だった。

「面白そうだ、中に入って見ようぜ！」

「ちよっ…っ！？マツシュ殿、待つでござる！！」

嬉しそうに列車内に入っていくマツシュと、それを慌てて追うカイエンの姿が見えた。好奇心で行動するのは危険な事だ。やはり奴はおつむが足りないらしい。

このまま引き返すかと考えるが、ここまで来たらバレンの滝まで付き合つてやるのが道理だ。どちらにせよ、中に入って調べるつもりだったしな。

舌打ちし、奴の無鉄砲さに呆れながら俺も二人の後を追って列車に走った。

「マツシュ殿！早くこの列車から降りるでござる！！」

カイエンがそう叫んだ直後だった。突如汽笛が聞こえてきたかと思うと、列車が僅かに揺れているのに気付く。最初は小さかった揺れで徐々に大きくなり、やがて一定の間隔で揺れ始めると、それに併せて何か音が聞こえてきた。それらが意味するモノは一つ。

列車が動き出したという事。俺達を乗せたまま、何処かへ向かうために。

異常事態に気付いたマツシュが慌てて外に出ようとして入ってきた扉を開けようとするが、ビクともしないらしく、悔しさからか拳で一発その扉を殴った。

「遅かったでござるか…」

カイエンがしまったという表情で呟く。

「何なんだ、この列車は？」

「恐らく…“魔列車”でござる。死んだ人間の魂を乗せ、霊界へと走る…」

「じゃあ俺達このまま乗っていたら死んじゃうじゃんか！！」

「そうなるでござる…」

魔列車…だがあの列車と同じ造りというのはどういう事だ？内装まで全く同じだ。

いや、考えるのはもういい。大事なのは、ここから脱出する事だ。脱出？このまま列車に乗って行けばビリーに合えるかもしれないというのに？

どんな顔をして奴に会えばいい？そもそも奴は俺と会う事を望んでいるのか？

自分に地獄を見せた男と　この俺と会う事を…！？

「列車を止めるぞ！俺はまだ死ぬ訳にはいかないんだ！」

「拙者もでござる！シャドウ殿　…シャドウ殿？」

我に返る。二人が何か奇妙な物でも見るかのような目で、俺を見ていた。

「どうしたでござるか？」

「何でもない。ただ、気分が悪かったただけだ」

「ああ、俺もさっきから何となく気分が悪い。靈気ってヤツのせいかな」

俺が奴に地獄を見せたのなら、俺も地獄を見なければならぬ。

そうだ、この列車に乗って行けば死ぬ。だが、それは安楽死と同じで、痛みなど感じはしないだろう。俺は激痛に悶え、苦しみ抜いてそして死ななければならぬ。それでなければ。俺が奴に会う資格などない。そう思っただけで死んでもおかしくない殺し屋になった。

何故今までその事を忘れていたのだ。さっさと思い出していれば無駄な思考をせずに済んだモノを……。

俺は一度深呼吸し、そして短刀を抜いた。

「俺も『列車を止める』に賛成だ。その道を邪魔する者は」

一閃。鋭い音と共に殺気を以て俺に背後から近付いて来ていた魔物が二つになって消滅した。

「殺す」

気付けば霊と魔物の群れに囲まれていた。一匹殺したところで、数は大して減っていない。

思わず冷笑する。暴れがいがあるようだ。

「さっさと蹴散らして列車を止めるぞ！手伝え！」

幽霊と呼ぶべき存在が、列車の至る所を徘徊していた。白装束を身に纏い、顔の部分がまるで闇のように黒く、汚れた白い眼だけが辛うじて見える。足はなく、中に浮いていた。

霊界へ運ばれる魂だと、カイエンは言った。成仏する、否に關係

なく、死んだ者はこの列車に寄せられるらしい。だから生に未練を残し“生ある者”を道連れにしたいと思う霊も多かった。

“生ある者”、それは俺達。

幽霊の手が俺の腕を掴む。黒装束越しに感じる酷く冷たい感覚に、思わず背筋が震える。

「くそつ、何なんだコイツらは!？」

「に、逃げるでござる!!」

幽霊の数が異常だ。その全てが、俺達を呪い殺そうとしているのか、迫ってくる。車両の外に出たまでは良かったが、狭い通路のため、瞬く間に囲まれてしまった。武器を手に抵抗してみるも、数は一向に減らない。死人が死ぬ事はないのだろう。少なくとも、物理攻撃では。

俺は躊躇なく短刀を掴んで来たその手を両断すると、二人の後を追って車両の上へと登る。誘導されているのか、それともただの偶然か、御丁寧に登るための梯子があった。畏かもしれないと思いつつも、そのまま車両の上まで登り切る。

「ちつ、奴らここまで追ってくるぜ」

強風に髪を靡かせながら、マッシュが毒気吐く。いつの間にか、何もいなかったはずの車両の上に幽霊が数対立っていた。ゆっくりと、こちらへ向かって来る。

鬱陶しい。

舌打ちしながら、短刀を構える。

「隣の車両に飛び移れ。コイツらは俺がここで食い止めておく」
「しかし」

「行け!こんな狭い場所で戦うには、お前らが邪魔なんだ!」

近付いて来ていた幽霊を一刀両断しながら口を開く。

「心配するな。こうなってしまったら、追加料金を頂くまで死ぬつもりはない」

それに……。

俺もコイツらには用がある。囲まれた時に感じた、懐かしい気配の正体を確かめなければならない。

そのためには、一匹一匹消していくしかない。

腰に差していたもう一本の短刀を抜き、二刀流の構えに改める。

「さて、始めるか」

二人の気配がこの車両から消えたのを確認すると、俺は徐々に増えていく幽霊の群れに向かって走り出した。

「よう、クライド。俺を呼んだか？」

全ての幽霊を蹴散らしたのとはほぼ同時だった。誰もいるはずのない背後から声を掛けられ、一瞬驚く。

聞き覚えのある声だった。…誰の声であるか、その刹那に悟った。期待と不安で胸を一杯にしながら、俺はゆっくりと振り返った。

「黒装束に漆黒のマスク…あんまり似合わねエ格好すんなよ」

俺の姿を見て笑うビリーがそこにいた。白装束の幽霊などではない。あの時と同じ姿、格好をしたビリーが、そこに立っていた。…どうやら夢でも幻でもないらしい。

俺は二本の短刀を鞘の中に収めながら、ビリーの姿を凝視した。そして、気付いた。

奴の手の中に、銀色に妖しく輝く得物がある事に。

「俺を殺しに来たのか？」

「そう思うか？」

「…」

ビリーは笑みを浮かべたまま、得物のナイフを手の中で器用に回した。何か考え事をしているかのような表情で俺を見て、やがて武器を構えた。

「刀を抜け。そして、俺と戦え」

「戦う事に何の意味がある？殺したいなら殺せ、お前に殺される覚悟は出来ている」

「フン、俺が戦いたいだけだ。付き合えよ、その後でゆっくり殺してやるからよ！！」

…それがお前の望みならば！

俺は再び短刀を抜いた。身構えようとしたその瞬間、銀色に光る何かが目の前を横切ったかと思えば、腹部に激痛が走った。裂けた傷口を見て、それがビリーによって斬られて出来たモノだという事に気付く。俺の目で追えない速さ、か。…面白い。

「どうした？余所見でもしていたか？」

背後からビリーの嘲笑する声が聞こえる。

「…その程度か？」
「あ？」

振り返らずに、そのまま俺は言った。

「まさかその程度で『本気だ』とは言わないよな？」
「…ケツ、何をほざいてやがる。お前なんざこの程度で十分なんだよっ！！」

「いや、お前では役者が不足している」

傷は大して深くはない。奴がその気なら俺の身体は簡単に真つ二つになっていただろうが、甚振って殺すつもりか、それとも他の意図があるのか、奴は時間を掛けて俺と遊びたいらしい。

このまま手を出さずにただ鬨り殺されても構わない。だが、奴が戦う事を望んでいるのならば。

「調子に乗んじゃねエぞ、クライド！！」

ビリーの性格は熟知している。挑発には必ず乗るタイプだ。背後を見なくても分かる、奴は今ナイフを振り翳し斬り付けようとしているはずだ。

だから、わざわざ背を向けて俺が何をしていたかなど、考えもしなかったはずだ。

「それはお前の方だ、ビリー！」
「…！！雷撃だとお……っ！？」

“らいじんの術” 自分を中心に電撃を進らせ、周囲の敵にダメージを与える術。

これでダメージを与えられずとも、一瞬の隙を作る事が出来る。
奴の呻き声から、奴が俺のすぐ後ろまで来ていた事が分かる。俺は短刀を握り締め、地面を蹴った。

「効かねエな、こんなモン!!」

「承知の上だ…っ!」

鋭い音がした。手に、肉を抉る感触が短刀を通して伝わる。

「ぐ…あ…っ!!?」

「そういう単細胞な所は変わってないな…。それが命取りだ」

腹部に深々と突き刺さった短刀。ビリーはそれを信じられないといった表情で見つめた。

その表情が突如笑みを浮かべた。やがて大きな溜息を吐く。

「なんてな …。実はこれも全く効かないのよね」

「…何?」

「元々死んでる人間をどうやったら殺せるんだよ?」

短刀を引き抜き、バックステップして間合いをとる。確かに腹を突き刺したはずなのに、ビリーは何もなかったかのように立っていた。短刀に血も付着していなければ、奴の腹部に傷もない。

「ビリー…お前は一体…」

「俺はただの幽霊だ。成仏出来ず、魔列車に十数年揺られっ放しの幽霊。いやー、あっちの世界とこっちの世界の行ったり来たりはなかなかのモンだぜ」

何を思ったのか、ビリーは手に持っていたナイフを捨てた。金属

音と共に地面に弾けたそれは、列車から落ちて闇に消えた。それを見ようとせず、懷に手を伸ばした。

別の武器かと思つた俺の予想に反して、懷から取り出したのは一本のボトルだった。

「ほら、使えよ」

そのボトルを俺に向かつて投げる。強風に流され、列車から落ちてしまいそうだったところを、何とか手に掴む。

ハイポーション…治療薬だと？…理解に苦しむ。

「俺を殺すのではなかったのか？」

「そんな事言つてないだろ？俺はただ、確かめたかったただけだ」

「…確かめる？」

「…お前が俺を、刺す事が出来るかどうか、だ」

一瞬、意味が分からなかった。だが時間と共に頭に上っていた血が引いていく事によつて、徐々に分かつてきた。

俺がビリーを刺さなかった時の事だ。ビリーが言いたいののは、今、俺はビリーを刺せたのだから、あの時も刺せただろうという事だ。だが、今と昔では状況が違つていた上、思いの大きさも違う。

あの時、ビリーは死を望み、何もしなかった。今回は、俺と戦つていた。戦いの中では俺は最も非情になる。相手が誰であろうと、関係がなく、そして容赦もなくなってしまう。

…もしかしたら、この十数年で、俺のビリーに対する思いが小さくなつてしまったのかもしれない。友であつたあの時と、今のこの時。何もなければ、時が経つにつれて全ての物事は色褪せていく。俺の場合、悪夢とも呼べるあの夢があつた。あの時と同じ思いを存続させるための、あの夢があつた。…それでも、色褪せてしまったのなら、俺は…。

「俺は…お前に謝らなければ……」

「あーあー、やっぱりそーゆー気持ちだったか。そんな気持ちを引き摺って十数年も過ごすのは大変だったろ？」

ビリーが笑う。何処か、淋しげな表情で。

「そりゃあ俺だってさ、最初はお前を怨んださ。お前があの時、俺を殺してくれてりゃあんな酷い思いせずに済んだんだからなあ。けどよ、やがて死んで、この魔列車に乗った時に思ったんだ……」

「もし俺とお前が立場が逆だったら、俺はお前を殺せたのかつて。間抜けだよなー、改めて考えると、答えは“ノー”しか出て来ないんだからよ」

あの時の感情が心の奥底から甦ってくるのを感じながら、俺はただビリーを見つめていた。

「それで、俺はお前に謝りたくて…ただそれだけのために、魔列車を降りなかった。何十年でも、何百年でも、お前が死んでこの列車に乗ってくるのを待つつもりだった」

「俺はお前に謝られる事など、されていないと思うが……？」

「殺せと頼んだら？あの時、俺が何も言わなければお前ももうちょつと楽に生きて来れたんじゃないのか？だから、そのために謝りたかった。けどよ」

俺の顔を見ながら、ビリーが再び笑う。

「まさかこんなに早く、しかも生きてこの列車に乗ってくるとは思わなかったぜ。まあ、それはともかく…コホン。ええと、すまなか

った。辛かったろ、色々と」

「いや、俺の方こそすまなかった。拷問は地獄だっただろう？」

「大分厳しいのを予測してたから、そんなに大したモンじゃなかったぜ？殴られ蹴られ最後にギロチン。そりゃあさくつとギロチンにしてくれたら一番楽だったけどさ」

「フツ、四肢切断というのはガセだったようだな」

「そうだな。って、それは俺が勝手に言っただけなんだけどな」

「…何だと？」

「あーあー、そう怒りなさんな。ただでさえおつかねエマスク被ってんのによ」

「…まあいい。一つ、質問してもいいか？」

「ああ」

「この魔列車は…あの列車なのか？」

列車を見てからずっと気になっていた事。

何故、あの列車と同じなのか。別に聞く必要もあまりない事だが、それでも気になったモノは仕方が無い。

「そうだ、これはあの列車だ」

「…壊れたはずの列車が、何故だ？」

「あの列車が、初めて“殺された”列車だから、らしい」

「どういう事だ？」

「物にも“思い”ってモンが存在するんだとさ。意図的に起きた事故で廃棄されたこの列車が、『まだ生きたい』と思った。『まだ走りたい』と思った。そして、その事態を招いた人間に憎悪を抱いた。…それらの思いが凝縮されて出来たのがこの魔列車だ。実態は存在しないんだ、この列車は」

「だが、現に俺はこの列車に乗っているぞ」

「そりゃーアレだろ、ホームに着いた時点でお前の身体は半分死んじまつてるんだ」

「…よく分からないな」

「別に分かる必要はない。大事なものは、どうやって脱出するか、じゃないのか？」

「知っているのか？」

「十年以上この列車には世話になってるからなあ。一番前の車両：機関室っていうんだけど、そこに行けば分かる」

「いい加減だな」

「うるせエ、文句言うな」

昔の俺なら、ここで笑っていただろう。だが今の俺は、笑う事が出来なかった。あの日以来今まで、感情を押し殺して生きてきた。それなのに今笑ってしまったら、何か…俺の心の何かがへし折れてしまいそうだからだ。

ビリーも俺がそこで笑うと思っていたようだ。予想が外れたためか、少々ふて腐れた声で言う。

「さて、俺の用も済んだし、あっちに到着したら降りるか」

「やはり、逝くのか？」

「ああ、会えて嬉しかったよ。今度会う時は地獄だな」

「そうなるな。俺も、会えて嬉しかった。何か吹っ切れたような気がする」

「ハハ、そうだな。今のお前はそんな顔をしてそうだ」

「フン。…俺も行かなくてはな。あの二人に列車の止め方を教えてやらなければならない」

「…いい仲間だな」

「仲間ではない、奴らは金蔓だ」

「少なくとも、アイツらはお前の事を仲間だと思っているようだぜ？」

「今の俺には、仲間など必要ない…」

「本気で言ってるのか？」

「まあな」

「ま、好きにしろ。けど忘れるなよ。仲間ってのは、悪くねエモンだと言う事をな」

「…」

ビリーの姿が徐々に消えていく。その中で奴は再び口を開いた。

「…俺からも一つ、質問してもいいか？」

「何だ？」

「何でさっき、お前は俺の腹を刺したんだ？お前なら心臓を狙うと思ったんだが」

そういえば、と俺も思った。

刺す事は躊躇しなかった。だが、心臓を刺す事には躊躇したのか？それともただ手元が狂っただけか？

…いや、違う。

俺は、今でもまだ、奴を殺す事が出来ないのだ。それは俺が、今でも奴の事を、“友” “親友”だと思っている証拠でもある。

「それは」

そう口に出すのは妙に照れ臭い。俺は奴から視線を外すと、言った。

「またいつか会えた時に、教えてやる」

その言葉はビリーに届いたのだろうか。奴はもう、俺の顔を見る事はなかった。そして奴の顔も、俺はもう見る事はなかった。

俺は言った ……ついさっきまで、ビリーが立っていた場所に向かって。

「また、いつかな」

俺がマツシュとカイエンの元へ到着したのは、奴らが魔列車を倒した後だった。どうやら列車の止め方は簡単に分かったらしい。ビリーがいい加減に話した程度だから、そうなる事とは予測はしていたが… たった二人で魔列車を止める事が出来たとは、少しだけ奴らの事を見直した。話を聞く限りだと、線路の上を列車に轢かれないうちに走りながら攻撃したとか。

今は機関室の前の車両で、魔列車が止まるのを待っていた。俺達を降ろす前にやらなければならない事があるらしいが…。

「どうした、シャドウ？」

不意に立ち上がった俺に、マツシュが声を上げた。

「もうすぐ着くだろうから、座って待ってるよ」

「いや… 少し、外の空気を吸って来る」

それだけ告げると、俺はその車両を出て魔列車の最前部まで歩いた。吹き抜ける風が心地良い。寒い程に感じるその風は、俺を悪夢から目を覚まさせてくれるようだ。

…俺もやらなければならない事があった。

そう、それは…。

「魔列車…この俺を覚えているか？ いや、お前は知らないかもしれ

ないな…。俺は、お前を“殺した”男だ」

虚空に向かって、俺は言った。奴らが魔列車と言葉を交わしたのだから、俺と交わせない訳がないと思った。当然、相手の気持ち次第だ。

『…知っている』

直接頭の中に声が響いてくる。男とも女とも属さない声だ。

『あの男がとうとう降りてしまうか。少し、淋しいものだ』

「…」

『それで、何か用があつてここに来たのだろうか？それともただ罵られに来たのか？』

「…俺がお前を“殺した”のに、深い理由も、意味もない。ただ俺は、お前を見ているのが辛くなった。お前が存在している事実が辛くなった。お前さえいなければ…そう思うようになってしまった」

何もない空間に向かって話す姿は、他の者が見れば滑稽に映るだろう。だがこれでも、聞き手はしっかりと俺の声を聞いてくれる。

「俺は、友を間接的に奪ったお前が憎かった。それだけが理由だ。殺したければ殺しても構わない…」

『お前を殺しても、何も変わらない。私は今の自分に不満を感じていないし、それにお前への怨みはとうの昔に消えてしまった』

「…すまなかつた。お前にも一言、謝りたかつた」

『詫びの言葉なら、もう十分にあの男から頂いた』

「ビリーからか？」

『あいつは毎日のようにここまで来て、すまなかった、アイツを許してやって欲しい、と頭を下げた。おかげですっかりと憎悪も消えてしまった』

「…そうか」

『もうそろそろ到着する、車両に入って待っている。いつか、お前が本当に私に乗る日が来た時にまた、話をしよう』

「いいだろう。案外、すぐかもしれないがな」

結局、ビリーは死して尚俺の事を考えてくれた訳、か。

侘びる事ばかり考えていたせいか、言い忘れていたな、奴に…。

ありがとう、と。

ただ一言、礼の言葉を。

魔列車から降り、森を抜けて少し歩いた所に、バレンの滝はあった。初めて見る訳ではないが、その光景には何度見ても息を呑んでしまう。滝の高さは100mを軽く越え、滝の方へ近付くだけで弾けた水が衣服を濡らす。下を迂闊に覗き込めば落ちてしまいそうな感覚に陥ってしまう。誤って滝壺に落ちてしまえば、まず助からない。

「うわー、すっげーな」

「ここを飛び降りるでござるか？拙者、少々怖くなってきたでござるよ…」

とにかく、俺の役目はここまでだな。
報酬の入った袋を腰にぶら下げ、来た道に振り返る。

「シャドウ！」

黙って行こうとした俺に気付いたマツシュが叫んだ。立ち止まり、横目で奴を見る。

「また一緒に冒険しような！！」

そんな事が。

俺は別に、気分にもよるが金さえもらえればある程度までなら協力してやる。

しかし、“冒険”という響きが何故か心に残る。今まで世界各地を旅していて、冒険をしているという気持ちになった事は一度もない。今回もそうだ。俺はただ、金目当てで奴らとここまで来た。色々あったが、それが事実だ。

俺にとってはこうでも、奴にとっては冒険だったらしい。

「…フン」

冒険、か。…悪くない。

この、何処か晴れた俺の心は、奴らのおかげでもある。奴らと出会う事がなければ、魔列車に出会う事もなかった。ビリーと再会する事もなかった。

と言っても、奴らに礼を言うのは少々癪だ。…その代わりだ。またいつか会った時、俺の力を必要とするようなら、手伝ってやるか。

勿論、金取るがな。

俺は再び、歩き出した。

…次に着いた街で、今回もらった報酬を使って高い酒を頂くか。

今宵の酒は、美味くなりそうだ。

F
i
n
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7472m/>

SHADOW from FINAL FANTASY 6

2010年10月22日00時11分発行